

仏教認識論の研究

——法称著『プラマーナ・
ヴァールティカ』の現量論——

下巻

戸崎宏正著

大東出版社

らば、(惑乱のために⁽⁸¹⁾) 知の分において対象を確立する (= 仮立する⁽⁸²⁾) から。その場合、まさに自己領納 (= 自証) こそが「対象の決知」である。

yadā vaṣiṣayam jñānam jñānamśe 'rthavyavasthiteḥ |
tadā ya ātmānubhavaḥ sa evārthavinīscayaḥ || (339)

(なぜならば⁽⁸³⁾, 或る人によって⁽⁸⁴⁾) 好ましい形相をもった

くないものと認識する』(PSV) である。(いま) まさにそのことが (法称によつて) 『知は対象をもつ云々』(PV, k. 339) と述べられ、(それがまた Devendrabuddhi によつて) 『対象をもつ云々』(PVP ad PV, k. 339) と注釈されたのである。」(phyi-rol gyi don med-pa la rañ-rig-pa ni hbras-bu yin (PS, k. 9a) shes brjod nas, don nes-pa ni de dños yin (PS, k. 9b) shes bśad do, deḥi ḥgrel-ba ni gañ gi tshe yul dañ bcas-paḥi śes-pa don yin-pa deḥi tshe rañ-rig-pa dañ rjes-su-mthun-pa deḥi don rtogs-pa ḥdod-pa dañ mi-ḥdod-pa (PSV) shes-bya-ba yin no. de ñid ni gañ tshe yul bcas śes-paḥi (PV, k. 339) shes-bya-ba la-sogs-pa smos te, yul dañ bcas-par (PVP) shes-bya-ba la-sogs-pas ḥchad-par byed do.)

(81) PVV, p. 221, l. 14 : viplavavaśāt.

(82) PVP, 262b² : tha-sñad ḥdogs-paḥi phyir ro.

(83) PVP, 262b³ : ciḥi phyir she na.

なお、この第340偈が唯識説に立った論述か、外境実在論に立ったものであるか、注釈者たちの間に見解の相違がある。Devendrabuddhi は、この偈を「唯識 (説に立った場合) の“果の解釈”を述べたもの」(rnam-par-rig-pa tsam ñid kyi hbras-buḥi rtog-pa ḥdi bśad do, PVP, 262b⁴) という。

これに対して、Prajñākaragupta は、「外境の対象 (の実在) をみとめる者にとつても、まさに自証こそが果である。なぜならば……」(bāhyam artham abhyupagacchatām api svasamvedanam eva phalam, yataḥ……, PVBh, p. 392, ll. 13-14) と述べ、この偈を外境実在論に立った「自証=果」説の理由を述べたものとみている。

Śākyamati は Devendrabuddhi の上述の見解を注釈して、つぎのように入う。「『唯識 (説に立った場合) の“果の解釈”を述べたもの』(PVP) というのは、『自証が果である』(PS) というこれによつて、自証のみが果であるという解釈がなされたが、それが『対象の決知 (というも、それ) はそれ (= 自証) を本質とする云々』(PS) の論述によつて述べられ、(その) 解釈が成就された、という意味である。これは、唯識 (説に立って) ききに述べられた“果の解釈”より異なった“果の解釈”とみなされるべきではない。まさに同じことがこれによつて述べられたのであるから。」(rnam-par-rig-pa tsam ñid kyi hbras-buḥi rtog-pa ḥdi bśad do (PVP) shes-bya-ba ni rañ-rig-pa ni hbras-bu yin (PS) shes-bya-ba ni ḥdis rañ-rig-pa tsam gyi hbras-buḥi rnam-par-rtog-pa gañ yin-pa de don nes-pa ni de dños yin (PS) shes-

それ (= 知) の自体が、あるいは別様の (= 好ましくない形相をもった知の) 自体が領納されるとき、かれによつて、対象が好ましいもの、あるいは好ましくないものとして知られる (から)。

yadīṣṭākāra ātmā 'syā⁽⁸⁵⁾ anyathā vā 'nubhūyate |
iṣṭo 'niṣṭo 'pi vā tena bhavaty arthaḥ praveditaḥ || (340)

外境の実在をみとめない唯識説においても、知は外境対象をもつ——外境対象を認識する——といえる。なぜならば、人は知にある対象形相を、惑乱 (viplava) のために、あたかも外境対象のように仮立 (prajñapti) するからである。すなわち、自身のなかに対象の形相をもった——たとえば好ましい対象形相をもった——知が知自身によつて領納される——自証される——とき、あたかも外境対象が好ましいものと認識されているかのよう誤って経験される。つまり、自己領納 (自証) が「対象の認識」として誤って経験されるのである⁽⁸⁶⁾。

bya-ba la-sogs-paḥi gshuñ gis bśad ciñ rtogs-pa bsgrubs* shes-bya-baḥi don to. rnam-par-rig-pa tsam ñid kyi snar bśad-paḥi hbras-buḥi rnam-par-rtog-pa las ḥdi hbras-buḥi rnam-par-rtog-pa gshan yin no shes blta-bar mi byaḥo. de ñid ḥdis bstan-paḥi phyir ro, PVT (S), 272b²⁻⁵. *Peking ed. の rtogs la sgrubs を Cone ed. によつて訂正.)

Ravigupta は、「あるいはまた、外境対象 (実在) 論によつても、自証こそが果であるとみとめられる。すなわち——」(gshan yañ phyi-rol gyi don du smra-bas kyañ rañ-rig-pa ñid hbras-bur khas-blañ-bar-bya ste, ḥdi-ltar —, PVT (R), 152a⁶) といい、また Manoranthanandin も「外境対象 (実在) 論においても……」(bahīrathanaye 'pi, PVV, p. 222, l. 1) といい、両者は Prajñākaragupta の解釈に一致する。

この偈は、外境実在論、唯識説のいずれにも解することができるが、いまは一応 Devendrabuddhi, Śākyamati に従つて唯識説に立った論述とみておく。

(84) PVP, 262b³ : skyes-bus.

(85) PV-k (I), (II), (III) : ātmā syād. しかし、PV-k (t) は ḥdi bdag であり、PVV, p. 222, l. 1 に 'syā buddher とあり、PVP, 262b³ に blo ḥdi という。おそらく、偈中の asyā (= ḥdi) を buddhi (= blo) と注釈したものであろう。いまはこれに従つて、ātmā 'syā とみた。

(86) したがって外境対象は遍計所執性となろう。

B 外境実在論

量果について法称は、

(i) 第301偈—第319偈において、外境実在論(経量部説)に立って、「対象の認識」を量果とみなす見解をとり、

(ii) 第320偈—第337偈においては、唯識説に立って、量果は自証であることを論証した。

いまかれは、

(iii) 第341偈—第352偈において、外境実在論によっても、自証が量果とみなされるべきことを論じる⁽⁸⁷⁾。

a 外境対象は領納(自証)に従って決知される

まず法称は、外境対象をその存在のままに認識することがありえないこと、そして実は知の領納(自証)——それは認識者によって個人差がある——に従って対象は決知されることを述べる。すなわち、

外境に対象が存在する(とみなす)場合でも、それ(=外境対象)自身はただ領納(=自証⁽⁸⁸⁾)に従って決知されるのみである。(外境対象それ)自身の相のままに(決知され)ない。
なぜならば、(同一の外境対象に)多数の自体がある過失となるから⁽⁸⁹⁾。

vidyamāne 'pi bāhye 'rthe yathānubhavam⁽⁹⁰⁾ eva saḥ |

(87) 本書, p. 2, 注(7)参照。

(88) PVP, 262b⁴⁻⁵: ji-ltar fāms-su*-myoñ fīd de (偈), ji-ltar rañ-rig-pa fīd do. (*Peking ed. では su を欠く。Cone ed. によって補った。)

(89) 海惠宏樹氏「ŚLOKAVĀRTTIKA の関説する仏教説」, インド学 試論集, No. 1, p. 37, 注3に訳出されている。なお M. Hattori, *Dignāga, On Perception*, p. 105, l. 13 ff. 参照。

(90) PV-k (III): yathānubhava.

niścītāmā svarūpeṇa nānekātmatvadoṣataḥ || (341)

外境対象の実在をみとめる見解においても、外境対象がそのままの相で認識されるとはいえない。外境対象は、領納——自証——に従ってのみ認識される。なぜならば、同一の対象に対して、或る人は好ましいもの(iṣṭa)と認識し、他の或る人は好ましくないもの(aniṣṭa)と認識するということがあるが、もし外境対象がそのままの相によって認識されるのであれば、一つの外境対象に好ましい自体と好ましくない自体とがあることをみとめなければならない。しかしそれは過失である⁽⁹¹⁾。

したがって、外境対象の認識というも、実はそれは、領納——自証——に従うというべきである。それゆえにまた、自証こそが量果とみなされるべきである⁽⁹²⁾。

(一つの外境対象に多数の自体があると)みとめても、その場合は二人の領納が相違してあることがなくなろう⁽⁹³⁾。

abhyupāye 'pi bhedena⁽⁹⁴⁾ na syād anubhavo dvayoḥ |

たとえ一つの外境対象に、たとえば好ましい自体、好ましくない自体と

(91) PVV, p. 222, l. 8: iṣṭāniṣṭatvena puruṣābhyām ekasyārthasya grahaṇād anekātmatvadoṣaḥ prasajyate.

(92) Cf. PS, I-9ab: 「自証が果である。なぜならば、対象の決知(というも、それ)はそれ(=自証)を本質とするから。」(本書, p.1, ll. 7-12.)

(93) PV-k (I), (II), (III) には、この偈の前につきの偈がある。
yadi bāhyaṃ na vidyeta kasya saṃvedanaṃ bhavet |
yady agatyā svarūpasya bāhyasyāiva na kiṃ matam ||

しかし、PV-k (I) の出版本によれば、この偈を含まない写本(Shalu 僧院に属するもの)もあるという。PV-k (t) もこの偈を含まない。さらに、PVP, PVT (R), PVV は、いずれもこの偈を注釈していない。PVBh のみが注釈している。この偈を訳せば、

「もし外境対象が存在しないならば、何を認識するのか。もし根拠なしに、(知の)自身の相を(認識する)というならば、なぜ外境を(認識すると)許されないのか。」

となろう。

あるいは、これは PVBh 自身の偈であったものが、のちに誤って PV の偈とみなされたのであろうか。いずれにせよ、PV の前後の文脈からみて、この偈はなくてよい。

(94) PV-k (I): abhyupāyopabhedena.

いった多数の自体があるとみとめても、その場合は、或る人はその対象を好ましいと認識し、他の人は好ましくないと認識するといった相違がなくなろう。なぜならば、兩人とも対象全体を——好ましい自体と好ましくない自体とのいずれをも——認識するはずであるから⁽⁹⁵⁾。

また、

もし不可見(の業⁽⁹⁶⁾)が(一方を)隠覆するから、(そのようなことは)ない、というならば、まさに知は対象の力によるものでなくなろう。

adrṣṭāvarenaṇaṃ no cen⁽⁹⁷⁾ na nāmārthavaśā gatiḥ || (342)

(また)かの不可見(の業)が多数の自体(——好ましい自体、好ましくない自体——)をもつかの存在を、一つの自体として見せしめるとき、実にどうして対象を見せしめるものでありえようか。

tam anekātmakam bhāvam ekātmatvena darśayat⁽⁹⁸⁾ |

tad adrṣṭam katham nāma bhaved arthasya darśakam⁽⁹⁹⁾ || (343)

もし一つの外境対象の好ましい自体と好ましくない自体とのいずれか一方を、不可見の業が隠覆するのであれば、知は外境対象の力によって生じるとはいえなくなろう。換言すれば、知は外境対象の相のままに認識しな

(95) PVP, 263a¹: 「(好ましい自体と好ましくない自体とが) 混合した対象を混合したものとしてのみ認識することになろう。」 (yul ḥdres-pa la ḥdres-pa kho-nar rtogs-par ḥgyur ro.) PVT (R), 152b⁷: 「なぜならば、混合した相をもった対象に対する知は混合したものであるから。」 (ḥdres-paḥi ṅo-bo ſiīd can gyi yul rtogs-pa ḥdren-mar ḥgyur-baḥi phyir ro.)

(96) PVT (R), 153a²: ma mthoñ-baḥi las; PVP, 263a²: 「好ましい、あるいは好ましくないという領納を成就させる業。」 (ḥdod-pa dañ mi ḥdod-pa ṅams-su-myon-ba ḥgrub-par byed-paḥi las.) Cf. VS, VI-ii-12: 「また(欲求と嫌悪とは) 不可見より生じる。」 (adrṣṭac ca.)

(97) PV-k (II): adrṣṭāvarenaṇāt syāt cen.

(98) PV-k (I): darśayet.

(99) PV-k (I), (III): vedakam; PV-k (II): darśakam; PV-k (t): mthoñ byed-pa.

いことになろう⁽¹⁰⁰⁾。

また、外境対象の多数の自体のうちの一自体を見せしめるのであれば、それは外境対象を見せしめるものとはいえないであろう。つまりこの場合でも、不可見の業は外境対象をそれ自身の相のままに見せしめていないのである。換言すれば、人は不可見の業によって影響された知によって対象を決知する、といわれるべきである。

このような考え方は、むしろ法称自身の見解に近づくとすべきであろう(第341偈参照)。

ここでまた敵者の反論を予想し、それに答える。

もし好ましい、あるいは好ましくないという顕現をもつのは、分別であって、感官知ではない、というならば、それ(=感官知⁽¹⁰¹⁾)においても、(心身が)死兆(を示したとき)などでは、認識が(外境対象に)無関係であることが経験的に知られている。

iṣṭāniṣṭāvabhāsinyah kalpanā nākṣadhīr yadi |

ariṣṭādāv⁽¹⁰²⁾ asandhānam drṣṭam⁽¹⁰³⁾ tatrāpi cetasām || (344)

敵者は、外境対象を好ましい、あるいは好ましくないものと顕現せしめるのは分別であって、感官知は外境対象をそのままの相によって把握する、と考える。これに対して法称は、外境対象とは無関係に生じる——したがって外境対象をそのままの相によって把握しない——ことの明らかな感官知の事例を挙げて反論したのである。

(100) PVP, 263a³: don ji-lta-ba bshin du don rtogs-pa ma yin no shes-bya-baḥi tha-tshig ste.

(101) PVP, 263b¹: de la ḥaṅ* (偈) dbañ-po la brten-pa ſiīd la yañ. (* Peking ed. の ḥoñ を Cone ed. によって訂正。)

(102) PV-k (I), (II): aniṣṭādāv; PV-k (III): ariṣṭādāv; PV-k (t): ḥchiltas la-sogs-par.

(103) PV-k (I): iṣṭam.

b 結論——自証が量果である

ここで法称は結論を述べる。

それゆえに、外境が所量である（という見解に立つ）場合でも、果は自己領納（=自証）であるというのが合理である。なぜならば、それ（=知⁽¹⁰⁴⁾）の自性に従って、まさに（外境）対象の決知があるから⁽¹⁰⁵⁾。

tasmāt prameye bāhye 'pi yuktaṃ svānubhavaḥ⁽¹⁰⁶⁾

phalam |

yataḥ svabhāvo 'sya yathā tathāivārthavinīscayaḥ || (345)

以上論じられたように、外境に対象が存在するとみる見解においても、その対象をそのままの相によって認識するとはいえない。したがって、厳密に言えば、「対象の認識」を量果とみなすことはできない。対象は知の自性 (svabhāva) に従って決知される。したがって、自証 (知の自己認識) が量果とみなされるべきである⁽¹⁰⁷⁾。

c 量と量果

(1) 対象顕現性が量である

法称は第 341 偈以下に、外境実在論においても「自証が量果である」といわれるべきことを論じた。ところで、さきに第 301 偈—第 319 偈では、同じく外境実在論に立って「外境対象の認識」を量果とみなす見解をとったが、そこでは対象形相性 (対象顕現性, 所量相性) を量とみなした (第

(104) PVV, p. 223, l. 10 : asya (偈) jñānasya; PVP, 263b⁶ : ñams-su-myoṅ-ba (=anubhava, 領納) hdiḥi (偈).

(105) T. Vetter, *Erkenntnisprobleme bei Dharmakīrti*, Wien 1964, S. 81 に訳出されている。

(106) PV-k (III) : svānubhāvaḥ.

(107) 第 347 偈, 第 348 偈参照。

306 偈参照)。いま第 341 偈以下では、その「外境対象の認識」も実は知の自性に従うものであるから、正しくは自証 (知の自己認識) が量果とみなされるべきことを論じたのであるが、この場合でも同様に、対象顕現性をその量とみなすべきか、あるいはこの場合は知の能取分を量とみなす——唯識説と同様に——べきなのか、という問題が残る。そこでいう。

その場合、それ（=知）の対象顕現性こそが量である。能取の自体は、存在するけれども、外境対象に関しては量とみなされない。なぜならば、他（=外境）を対象としないから。

tadā⁽¹⁰⁸⁾ 'rthābhāsatāivāsya pramāṇaṃ na tu sann api |

grāhakātmā 'parārthatvād bāhyeṣv artheṣv

apekṣyate⁽¹⁰⁹⁾ || (346)

外境実在論においても、知に能取という自体 (能取分) が存在することをみとめる。しかし、その能取は知自身を対象とするものであって⁽¹¹⁰⁾、知より外の存在であるものを対象としない。したがって、能取という知の自体は、外境対象に関する知を確立する量とはみとめられない。

それでは、なぜ対象顕現性が量とみなされるのか。そこでいう。

なぜならば、この（外境）対象自体が、知に（写って）入っているままに決知されるからである。

(108) PV-k (II): tad arthā°. Manorathanandin はその tad を tasmād (それゆえに) と注釈している (PVV, p. 223, l. 13)。PV-k (I), (III): tadā 'rthā°; PV-k (t): te tshe don (=tadā 'rthā°)。Devendrabuddhi は「このように、外境対象 (をみとめる) 場合でも自証が (量) 果であるといわれるが、その場合」(PVP, 263b⁷: gañ gi tshe hdi-ltar phyi-rol gyi don la yañ rañ-rigs-pa hbras-bur brjod-pa, te tshe) と注釈している。

(109) PV-k (I), (II) : apekṣate; PV-k (III): apekṣyate; PV-k (t): bltos-par-bya-ba (=apekṣyate)。

(110) PVP, 263b⁸-264a¹: bdag ñid kyi yul can ñid yin-paḥi phyir ro; PVV, p. 223, l. 14: ātmaviṣayatvāt tasya. PVBh, p. 394, ll. 4-5: 「実に (知のなかに対象) 形相なくしては、自己を認識する (能取) は、(知より) 他のものを確立しない。なぜならば、(能取は) すべて (の知に) 共通するから。」(na hi svasamvedanaṃ parārthaṃ vyavasthāpayatv ākāravatirekeṇa sarvatra samānatvāt.) Cf. PVT (R), 154a³⁻⁴。

yasmād yathā niviṣṭo 'sāv arthātmā pratyaye tathā |
niścīyate

外境実在論によれば、外境存在はそれが知に写って入っている対象形相に従って決知されるのである。したがって、「外境存在の決知」を確立せしめるもの(量)は、その外境存在が知に顕現していること(対象顕現性)——別言すれば、知が外境対象の相を帯びていること(対象相性)——であるというべきである⁽¹¹¹⁾。

(2) 「対象の認識」は自証を本質とする

この場合、「外境対象の決知」というも、実はそれは自証を本質とするべきである⁽¹¹²⁾。すなわち、法称はつぎのようにいう。

「これ(=対象形相⁽¹¹³⁾)がこのように(知⁽¹¹⁴⁾に写って)入っている」と自証によって(認識される)。

niviṣṭo 'sāv evam ity ātmasaṃvidāḥ || (347)

したがって、まさにこれ(=自証⁽¹¹⁵⁾)が「(外境)対象の知」とみとめられる。なぜならば、(外境)対象自体は知覚されないから⁽¹¹⁶⁾。

ity arthasaṃvit sāvēṣṭā yato 'rthātmā na dr̥ṣyate |

知はただ外境対象によって与えられた対象形相をもって生じているだけではない。知は知自身を——したがって知自身に写っている対象形相をも——認識(自証)する。すなわち、「対象形相がこのように知に写って入っている」と自証する。そして、人がそのように自証するとき、かれは誤って「外境対象を認識している」かのように執する⁽¹¹⁷⁾。これが「外境対

(111) 詳しくは第301偈—第306偈参照。

(112) Cf. PS (本書, p. 1, ll. 11, 12).

(113) PVV, p. 223, l. 20: asāv (偈) arthākāra.

(114) PVV, p. 223, ll. 20-21: buddhau niviṣṭa.

(115) PVV, p. 223, l. 24: sāiva (偈) ātmasaṃvid.

(116) 第348偈—第362偈は、Vetter, *op. cit.*, S. 81-83 に訳出されている。

(117) 本書, p. 23, 注(78)参照。

象の知」といわれるものの成り立ちである。外境存在自体がそのままの相によって直接に知覚されるのではない。したがって、「外境対象の知」というも、その本質は自証にほかならない⁽¹¹⁸⁾。

(3) 対象形相が量であり、自証が量果である

したがって、

知に(写って)入っている対象(=対象形相⁽¹¹⁹⁾)がそれ(=自証を本質とした対象認識⁽¹²⁰⁾)の能成者(=量)であり、それ(=自証⁽¹²¹⁾)がそれ(=量)の行為(=果⁽¹²²⁾)である。
tasyā⁽¹²³⁾ buddhiniveśyārthaḥ⁽¹²⁴⁾ sādhanam tasya sā

kriyā || (348)

なぜならば、(外境)対象が(知に写って)入っているままに、

(118) 第319偈までに論じられた「外境対象の認識を量果とみなす見解」においては、その「外境対象の認識」とは、知が外境から与えられた対象形相を帯びて生じることにほかならなかった(cf. k. 307 cd-k. 309)。いわば、それは「外境対象の認識」を受動的に理解しているといえよう。しかしここでは、「外境対象の認識」を「外境対象の決知(niścaya)」と能動的にとらえ、その決知の本質が自証であることを論じていると解されよう。

(119) PVV, p. 224, l. 1: buddhiniveśyārtho (偈) 'rthapratibimbam; PVP, 264a⁵: myoñ-ba der gnas-pa (偈)……don dañ ḥdra-ba (=arthasārūpya).

(120) tasyā について注釈者たちは何もふれていない。この偈は PVin にも見えているが、いまそれに対する Dharmottara の注釈(PVinT(D), 175a⁸-b¹: rañ-rig-paḥi rañ*-bshin du gyur-pa don rtogs-pa hdihi (偈)。* Peking ed. では paḥi rañ を欠く。Cone ed. によって補った。)によった。

(121) Manorathanandin は sāv を adhigati と注釈している(PVV, p. 224, l. 2: sāv 'dhigatiḥ)。adhigati はおそらく arthādhigati (対象認識)であろう。しかし、Devendrabuddhi は「それ, i. e. 自証, がそれ, i. e. 知に(写って)入っている対象(=対象形相=量), の行為である」(PVP, 264a⁶⁻⁷: blo la gnas-paḥi don deḥi rañ-rig-pa de bva-ba yin no. 下線は偈。)と注釈し、de (=sāv) を rañ-rig-pa (=ātmaṃvid) に解している。Ravigupta (PVT (R), 154b³⁻⁴) も——おそらく Prajñākaragupta も——同様に解する。いま Devendrabuddhi 等に従った。

(122) PVV, p. 224, l. 2: kriyā (偈) phalam.

(123) PV-k (II): tasmād.

(124) PV-k (I), (II), (III): °niveśyārthaḥ. しかし PV-k (I) の脚注によれば、°niveśyārthaḥ とする写本(VA)がある。

それ (=自証) が現われるから。

yathā nivīṣate so 'rtho yataḥ sā prathate tathā⁽¹²⁵⁾ |

知に写って入っている対象形相のままに自証が現われる。そしてそのとき、人は誤って「外境対象を認識している」と執する。したがって、知に写っている対象形相こそが、自証を本質とした「外境対象の認識」を成立せしめるもの、すなわち量である、とみなされるべきである。そして「外境対象の認識」は自証を本質とするから、自証こそが量果といわれる。

(4) 量と量果は対象を異にしない

ここで反論が予想される。すなわち、もし(対象)形相が量であるならば、それゆえに(対象)形相は外境対象に関わる量であり、また量果である自証は、知(自身のなか)の相に働くから、(量と量果が)対象を異にすることになる⁽¹²⁶⁾。これは不合理である⁽¹²⁷⁾。この反論に対して法称は答えている。

(勝義に⁽¹²⁸⁾生じるのは)自証であるが、(外境)対象の確立

(125) PV-k (I): yathā nivīṣate so 'rtho jñāne tadvat prakāśate; PV-k (III): yathā nivīṣate so 'rthāḥ tathā hi sa prakāśate; PV-k (II): yathā nivīṣate so 'rtho yataḥ sā prathate tathā; PV-k (t): gaṇ phyir ji-ltar don de ni, gnaṣ-pa de-ltar de rab-gsal (PV-k (II) と一致)。PV-k (I) の出版本によれば Shalu 僧院に属する写本は PV-k (III) に一致する。PV-k (III) の hi を yataḥ の意味に解せば、PV-k (II) と PV-k (III) とは意味の上に相違はない。

(126) PVT(R), 154b⁵⁻⁶: ḥo-na gal-te rnam-pa tshad-ma yin-pa deḥi phyir* phyi-rol gyi don la rnam-pa tshad-mar ḥgyur la śes-paḥi ṅo-bo fiid la ni raṅ-rig-pa** ḥbras-bu ḥjug-par ḥgyur-baḥi phyir yul tha-dad-par ḥgyur ro she na. (*phyir は Peking ed. にない。Cone ed. によって補った。**Peking ed. では raṅ-rig la であるが、Cone ed. によって訂正した。) PVBh, p. 394, ll. 17-18; PVT (S), 273a³⁻⁵ も同様にいう。

(127) 第314偈 ab 参照。

なお Śloka-vārttika に「対象形相が量であるならば、対象を異にすることになるから、合理でない」(ŚV, Pratyakṣa, 79cd: pramāṇe viśayākāre bhinnārthatvān na yujyate) という。いま法称はこの批判に答えていると解することもできよう。

(128) PVP, 264b¹, PVT(R), 154b⁷: don-dam-par; PVBh, p. 394, l. 22, PVV,

(=認識) がそれ (=自証) を本質として(生じる)から、(外境)対象の認識と考えられる。

arthasthites tadātmatvāt svavid apy arthavin matā || (349)

それゆえに、(量である対象形相と量果である自証とに)対象の相違もない。

tasmād viśayabhedo 'pi na

「外境対象の認識」といっても、それは対象を事実に——たとえば杖を手によって把握するように——把握するのではない。事実に(勝義に)生じるのは自証である。しかし、その自証が生じる時、人は「外境対象を認識している」と執する——偈の言葉でいえば、「対象の確立がそれ (=自証) を本質として(生じる)。」すなわち、自証も結果的には「外境対象の認識」をもたらす。したがって、自証も結果的には外境を対象とすることになるから、量果(自証)と量(対象形相)は対象を異にしない、といえる。

(5) 「自証」の勝義性と「対象の認識」の世俗性

以上、外境實在論に立って述べられた「量果=自証」の論述は勝義の立場に立ったものである。そのことを法称はつぎのようにいう。

(陳那によって)「自証が(量)果である。なぜならば、対象の認識(というも、それ)は、それ (=自証) を本質とするから」といわれたのは、(「対象の認識」の⁽¹²⁹⁾本性の吟味による)。

svasaṃvedanaṃ phalam |

uktam svabhāvacintāyām tādātmyād arthasaṃvidāḥ || (350)

陳那はさき(PV, k. 301-k. 319 に対応する箇所)に、外境實在論に立っ

p. 224, l. 6: paramāṛthataḥ.

(129) PVV, p. 224, l. 16: arthasaṃvedanasya vastutaḥ svabhāvacintāyām (偈)。

て「対象の認識」を量果とみなした⁽¹³⁰⁾。しかもなお、かれがいま、外境実在論に立っても（——唯識説に立つ場合は勿論だが——）「自証」が量果とみなされる、といったのは⁽¹³¹⁾、「対象の認識」の本性を吟味したうえである。換言すれば、勝義のうえからは「自証」であり、日常生活 (vyavahāra) においては「対象の認識」である⁽¹³²⁾。

ここでその外境実在論に対して、つぎのような反論が予想される。すなわち、この外境実在論も、外境対象はそれ自身の相の通りに認識されない、という⁽¹³³⁾。もし（外境）対象のままに領納されないのであれば、（知は）それを相待することなしに、自己の習気 (vāsanā) の覚醒から生じる（とみなされてしかるべきである。そのように生じる）知に対して外境対象が存在するとどうしていえようか⁽¹³⁴⁾、と。この反論に対して、つぎのように答える。

相似するにせよ、異なるにせよ、（外境）対象も、“そのように（=好ましい形相、あるいは好ましくない形相をもって⁽¹³⁵⁾）顕現する知”の因である。したがって（外境）対象が所量とみとめられる⁽¹³⁶⁾。

tathā 'vabhāsamānasya tādr̥ṣo 'nyādr̥ṣo 'pi vā |

jñānasya hetur artho 'pity arthasyeṣṭā prameyatā || (351)

(130) 『上巻』, p. 394 参照。

(131) PVP, 264b³: 「外境対象が所量である場合でも自証が果であるといわれたのは……。」(phyi-rol gyi don gshal-bar-byā-ba la yañ rañ-rig ḥbras-bu yin-par bśad-pa gañ yin-pa de ni…….) なお本書, p. 1 参照。

(132) PVT (R), 155a³: don-dam-pa la bltos nas rañ-rig-pa ñid yin la, tha-sñad la bltos nas ni don rig-pa. なお『上巻』, p. 46, l. 19-p. 47, l. 10 参照。

(133) 第341偈参照。

(134) PVP, 264b⁵⁻⁶: gal-te don ji-lta-ba bshin du ñams-su-myoñ-ba med-pa deḥi tshe, de la bltos-pa med-par rañ gi bag-chags sad-pa las byuñ-baḥi śes-paḥi phyi-rol gyi don yod do shes-byā-ba de ñid gañ las yin she na.

(135) PVV, p. 224, l. 23: tathā (偈) iṣṭāniṣṭākāreṇa.

(136) 宮坂有勝博士「量評釈の論理と著作的立場」, 印仏研, V-2 (昭和32), p. 79上に訳出されている。

外境対象と知とが相似するか否かはともかくとして⁽¹³⁷⁾, すくなくとも外境対象が知の因であることは、われわれが日常経験的に知っているところである⁽¹³⁸⁾。その点からして、所量としての外境対象の存在はみとめられる。

このように「外境対象の認識」をみとめる場合、外境対象によって知に与えられた対象形相の存在を理論上みとめざるをえない。換言すれば、知に対象形相が存在することをみとめないかぎり、「外境対象の認識」はみとめられない。このことを法称はつぎのようにいう。

何らかの状態にある（=好ましいもの、あるいは好ましくないもの等として顕現する⁽¹³⁹⁾）対象相（=対象形相⁽¹⁴⁰⁾）なくしてそれが顕現するとき、どうして「（外境）対象の把握」であろうか。

yathā kathañcit tasyārtharūpaṃ⁽¹⁴¹⁾ muktva⁽¹⁴²⁾

'vabhāsinah |

arthagrahaḥ katham

経量部は対象（所縁）の条件としてつぎの二つを挙げる⁽¹⁴³⁾。

(1) 知の因であること

(137) PVV, p. 225, ll. 1-2: 「相似性は勝義の立場から、『かのもろもろの極微が、粗として顕現するそれ（=知）にどのような相によって相似するであろうか』(k. 321 cd) と否定されているから。」(sārūpyasya paramārthataḥ “sarūpayanti tat kena sthūlābhāsañ ca te 'nava” iti pratiṣedhāt.) なお第323偈参照。

(138) PVP, 264b⁸: 「他の縁が近くにあっても、それが存在しなければ、知は（生じ）ないから、感官等は知の因である。（外境）対象も同様にして（知の）因である。」(ji-ltar de las gshan-paḥi rkyen ñe-ba yañ de med na yañ śes-pa med-paḥi phyir dbañ-po la-sogs-pa śes-paḥi rgyu yin-pa de-ltar re-shig don yañ rgyu yin no.)

(139) PVV, p. 225, ll. 5-6: yathā kathañcid (偈) iṣṭāniṣṭādinā bhāsamānam. Cf. PVP, 265a².

(140) PVV, p. 225, l. 6: artharūpaṃ (偈) arthākāraṃ.

(141) PV-k (I): 'cin nāsyārtha°.

(142) PV-k (I), (III): yuktyāva°; PV-k (II): muktva°.

(143) 『上巻』, pp. 38-39.

『上巻』(初版, 昭和54年)の訂正表

(*を付したものは偶の数え方の改変による。下巻「はしがき」参照。)

〔頁, 行〕	〔誤〕	〔正〕
vi, 6	昭和42年	昭和41年
viii, 6	頭初	当初
xvi, 24	chapter	Chapter
18, 3	相互に対象が異なって	相互に異なって
*35, 18	PV, k. 320-541	PV, k. 320-539
36, 20	他の想定	他の理解
*46, 12	第353 偈	第352 偈
*46, 20	k. 346	k. 345
*47, 3	k. 349ab	k. 348ab
*47, 4	(k. 349cd, cf. k. 347)	(k. 348cd, cf. k. 346)
*47, 7	(cf. k. 351 bcd)	(cf. k. 350bcd)
52, 最終行	brtos-pa	bltos-pa
54, 6	帰を一にする	軌を一にする
57, 19	tag	dag
125, 最終行	PVT	PVT(S)
133, 18	PVS	PSV
181, 17	如何なる部分	如何なる他の部分
205, 33; 206, 24; 207, 24; 208, 26		
454, 左, 最終行	Bartṛhari	Bhartṛhari
*222, 7	第503 偈 ab	第502 偈 ab
*222, 14	第522 偈	第520 偈
225, 19	jñānenārthāntarāgrahāt	jñāne 'narthāntaragrahāt
264, 21	Sder-dge	Sde-dge
*282, 最終行	(第485 偈—第512 偈)	(第484 偈—第510 偈)
342, 23	tasmāindriya°	tasmād indriya°
364, 27draṣṭṛtvam.draṣṭṛtvam.....
375, 2	kim āśrayau	kimāśrayau
445, 右, 11	grahana	grahaṇa
467, 右, 25	svaya	svayam

戸崎宏正 (とさきひろまさ)

昭和5年 下関市に生まれる

現在 九州大学文学部教授, 文学博士

現住所 〒818-01 福岡県太宰府市3条台8-1

翻訳 善勇猛般若経, 「大乘仏典」I (中央公論社) 所収

論文 後期大乘仏教の認識論, 「講座・仏教思想」第2巻 (理想社) 所収
ダルマキールティの認識論, 「講座・大乘仏教」第9巻 (春秋社) 所収
その他

仏教認識論の研究 下巻

昭和60年2月15日 初版印刷 ©
昭和60年2月25日 初版発行

定価 5,800円

著者 戸崎宏正
発行者 岩野文世
印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 凸版製本発行所 株式会社大東出版社
東京都文京区白山1-37-10
電話 03(816)7607

ISBN 4-500-00495-5 C3315 ¥5800E